2025年6月22日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

あなたの命は、神様の宝

［フィリピの信徒への手紙3章9～21節］

わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてくださいます。いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

[1] 「終わり」（ゴール）から生きる

　 私が時々思い起こす言葉なのですが、信仰者とは、「終わりから（ゴールから）生きる人」と言われることがあります。普通だったら、スタートから生きる、ということだと思いますが、終りから生きると。この「フィリピの信徒への手紙」を書いたパウロという人は、正にそういう人だったと思います。

　先週はこの「フィリピの信徒への手紙」3章の前半の部分を読みました。そこには、彼がイエス・キリストとの出会いによって、これまでの生き方が全く変えられてしまったということを明確に語っていました。これまで自分にとって有益だと思っていたものなど、キリストと出会った今は、本当に無価値なものになってしまったということ、そのことを、むしろフィリピの教会の人々を励ますような意味からも書いているのだと思います。そして、今日の箇所では、パウロは自分の生涯の最後の日のことを思いながら書いていますね。

　パウロがこの手紙を書いたのは何歳位の時なのでしょうか？―恐らく50歳代後半か60才前後かと言われています。私たちの感覚ではまだ若いと思いますが、当時としては、人生の終わりを自覚する年令だったと言われます。この手紙の中で、彼はこう語っていますね。3:10～11。「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」　キリストの復活ゆえに、自分も死者からの復活に達したいと、自分自身のゴールを見据えながら語っています。今彼はローマの獄舎の中に閉じ込められているのです。どういう判決が下されるか分からない。死を宣告されるかもしれない、孤独な、狭い空間です。ですから、彼の言葉は遺言のようにも響いてきます。一番言いたかったことはこれだと。（私たちも、そのような信仰の言葉の遺言を遺すことは大事な事かもしれませんね）。彼の最終ゴールは、復活の主の命に与りたいということです。そして、そういうゴールが与えられるという確信があったからだと思います、彼は獄舎の中で、死をも意識しながら、フィリピの教会のことを思い、自分の今の思いを語りながら、彼らを励ますのです。ただ偉そうに説教しているのではありません。自分をよく見つめながら、私の信仰はこういう信仰なのだ、私を見ていて欲しいと、教会の人たちを励ましているのです。これぞ牧会者ですね。こう語っています。12節以下です。

[2]　 「らせん階段」を進んで行こう

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」

これ、信仰は、レースだと言っていると言ってもいい言葉ですよね。私たち、「そりゃそうだ、孤独なレースだ」と思うよりも、ひたすら目標を目指して走り続けるなんてしんどいと思ってしまうのではないでしょうか？大体キリスト教信仰とは、自らの努力で獲得するものとは違いのではないでしょうか？と言いたくなります。…でも、そうじゃないんですね。パウロはこれを、空元気な気持ちで語っているのではないと思います。彼が捕らわれの身という、普通なら希望を持ちにくい状況にあっても、その内面が、全身を前に傾けて進んで行こうとするのは、「自分がキリスト・イエスに捕らえられているから」（12節）だと言うのですね。決して自分の修行とかガンバリじゃない。主がこの私を捕えていて下さる！と。

それにしてもパウロは「目標を目指してひたすら走る」と語っています。それだけ聞くとちょっと疲れそうです。でも、彼がこれを書いたのは、晩年の、しかも獄中です。走ると言っても誰かと競争している訳ではなく、自分自身に与えられたレースのことだと思います。そしてそれは、「走る」と言うより、実際には一足一足歩んで行く「歩み」と言っても良いのではないでしょうか。

そして思うのです。私自身、信仰を持っていても、心が波立ったり、辛さに押し潰されそうになるような時も、又生きる喜びを感じられない日もあったりします。それは不信仰なのでしょうか？ そうなのかもしれません。けれども私が思うに、神様は、私たちが皆オリジナルな独自の命を、時に迷いながら生きることを応援してくれていると思うのです。私、パウロが「目標を目指してひたすら」と言いますけれど、それは一直線のような坂道ではなく、「らせん階段」のようなものなのかもしれないと思いました。上から見れば同じ所をグルグル回っているようで、まるでローテーションと思えるような日々であったりするかもしれませんが、実は一歩づつ目標に向かって足を進めているんじゃないかなと思うんです。

　パウロ自身、辛いこと、苦しいこと沢山あった人です。でも、彼はそういうことの中でこそ、十字架の主イエス様を仰ぎ見ました。10～11節をもう一度見ると、「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と言っています。‟神様は私をお見捨てになさならない！こんなつまらない私のために一緒になって苦しんでいて下さる十字架の主がいて下さる！”と。そういう中で彼は、神様の憐みの大きさ、そして、自分の命が、復活の光の中に招かれていくその望みがいよいよ確かなものになっていった、ということではないでしょうか？

[3] ここまで走っておいで！待っているから

「レース」には必ず終わりがありますね。終わりがなかったら、そのレースはそれこそ恐怖です。しかし、確実に終わりはあって、私たちには、「ここまで走っておいで！」との声がかけられています。それはその場所を知り、既にそこで待っておられるお方からの応援の呼びかけですね。

父なる神様が待ってい下さる場所は、良い場所です。私たちはそれをイエス様の話から知っています。あのルカ福音書15章の「放蕩息子のたとえ話」です。あの放蕩息子は、まだ生きているお父さんから財産を受け取り、自分の楽しみにためにその財産を使い果たしてしまった訳です。お父さんを捨てた挙句、今自分は、飢えて野垂れ死にしそうになっている。その時思ったことは、何と虫の良い話なのでしょう。「父の所に帰れば、食べるものも沢山ある」と。でも、もう子として迎えてくれなくてもいい。雇い人同様で良いから帰ろうと思った。そうしたら、その道の途上で分かった。父が自分のことを待っていた。父は自分を見つけるや否や、老人なのに走ってきて、自分を抱いてくれた。無条件の赦しです。計算しない、愚かしいほどの愛。これが私たちに与えられるゴールです。父は言いましたね。「この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのにみつかったのだ」と。

フィリピの信徒への手紙でパウロは言いました。20節。「わたしたちの本国は天にあります」。「本国」。本当のふるさとを持っているのだと。そこで私たちは、あの放蕩息子が最上の着物と食事を用意されたように、何と「（神が）お与えになる賞」（3:14）が待っているのです！最高に命が祝される時が与えられるのです！…それはどういうことでしょうか。21節です。「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

　主よ、なぜ、そこまでして下さるのですか？と言いたくなります。その理由は私たちには本当は分かりません。なぜ、罪人の私たちのために主がそこまでして下さるのか。でも、ハッキリしていることは、私たちの命は、神様にとって失ってはならない本当の「宝物」として愛されている、ということです。常識外れの愛です。

その愛に背を向けずに、前を向いて進んで行きましょう。一人でも多くの人々と一緒に。お祈り致しましょう。

主イエス・キリストの父なる神様、パウロが残してくれた手紙の言葉を通して、あなたは私たちの命を本当に「宝」として愛して下さっていることを知り、感謝致します。私たちには、弱さがあります。病気にもなります。年齢も重ねます。しかし、あなたは、私たちの内なる人をいつも新しくして下さるお方です。信仰は、いつも「今」だからです。どうか、今日あなたを新しい思いで賛美させて下さい。あなたに捕えられている存在として、与えられている人生を一足一足前に進ませて下さい。あなたのエールをもらいながら、あなたが待って下さる場所へ到着させて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。